

介護相談員の声

「共につくる介護の場」

おはようございます。貝沼三枝子です。私は介護相談員を始めて1年半になります。かつて私が母の介護をしていた時は、どうしても介護者・家族の視点で施設を見てしまいましたが、介護相談員として施設を訪問するようになってからは、できるだけ施設を利用する当事者の視点を大切にと心がけています。それは、高齢の利用者さんは自分の思いや希望を口にするのみでなく、御自分の気持ちに目を向けることすら遠慮される傾向にあるからです。この活動の中でいろいろ学ばせて頂いています。

ひとつには利用者さんの言葉からです。「共同生活だから面倒なこともある。ふと、自分の家が懐かしくなることもある。でも、一人暮らしで、体の心配、日々の生活のめんどうさ、老いの進むこれからへの不安などに囲まれた、これまでの毎日を思うと、今は安心でうれしいよ。何ととっても、毎日の暮らしを心配することはないのだから。若い職員さんといると気も若返る。私はこの安心を選択してホームへの入所を決めた」という方。また「家族はやさしいし、皆、私を気遣ってくれるの。でもそれだけに、世話をかけることが増すと気遣いも増す。私はあまり気を遣いすぎるのは苦手。ここに来て家族を思ったり、家族が施設で暮らす私に心寄せてくれることの方が好き。これも良いものだよ。おかしなものだね。いままでやったこともなかったカラオケもおもしろいし…」と話される方もありました。もちろん、このような方々にとっても、高齢になってからの生活スタイルの変更や、施設での共同生活という生活環境は、様々な緊張を伴っているでしょうし、そこでの暮らしは決して100%満足なものではないと思います。しかし、その中で穏やかに安心して暮らすためには、自分の道の選択を家族や他人に任せてしまうのではなく、自分自身が納得して選択・決断することが、とても大きく関係しているのだと教えられました。

今、多くの施設では日々のかかわり方のみでなく、その利用者さんのこれまでの長い人生とその延長上にある今を大切にしようと、試行錯誤の努力や工夫を重ねておられます。それは10人の利用者さんがおられれば10の道があるということで、簡単には現場の職員さんの思いと利用者さんの願いがマッチするものではありません。皆さん悩み苦労されているところ。「それだけに喜んでもらえるお世話ができた時はとてもうれしいし、利用者さんと一緒に大喜びなのですよ」とのことでした。

介護というのは、介護する側からの一方通行的な構図ではなく、介護を受ける人と、そこにかかわる人が、それぞれ自分自身をしっかり持って、お互いを尊敬しながらの共同作業だ

と思います。

これからも利用者さんを中心に、家族さん、施設の方達と共に、利用者さんの、言葉になりきれない思いをもしっかり受け止め、安心した豊かな暮らしの場に向け、活動していきたいと願っています。ありがとうございました。

京都市介護相談員 貝沼 三枝子